

書籍「越後戊辰戦争と加茂軍議」

～平成29年2月19日付けの新潟日報に
書評が掲載されました～

稲川 明雄 著 **越後戊辰戦争と加茂軍議**

著者はかつて、長岡市立図書館「互尊文庫」の司書を務めていた。当時から、大学の研究者や歴史小説家の史料照会に応ずる機会が少なからずあったという。

「学者や作家の先生方というものは、自らの史観の枠組みに収まる史料を求めている。だから、その枠に収まらない、郷土を生きる人々の矜持や、先人たちの高い志が、活字になるなんてことはめったにないんだ」

うずたかく積まれた歴史資料越しに、無念の思いを込めて、そう語る著者がいた。

「ならば、稲川さん。あなたが自分で書いたらいー」

互尊文庫の手狭な事務室の片隅で、そんな話を交わしてから早や30年になる。

後に刊行された処女作「長岡城燃ゆ」以来、著書は優に10冊を超える。しかし、歴史作家としてのスタンスは一貫して揺るがない。

こういふ著者だからこそ、加茂商工会議所が白羽の矢を立てたのだろう。そうして成ったのが本書である。

3章(加茂の勤皇、加茂軍議、討薩ノ檄と長岡城奪還)からなる本書は、新聞連載小説を模してか、一話完結の小編をつないでゆく。

抗戦が
恭順か
皇朝は
皇朝は

越後戊辰戦争と
加茂軍議

稲川 明雄

にいがたの一冊

戦いの変遷 地政学的に分析

前回までのあらずじ風のサービスマもあり、ビギナーにも優しい。が、内容は極めて骨太だ。郷土史通の読者諸氏にとっても、本書は歯ごたえのある一冊である。

150年前、越後を戦渦に巻き込んだ戊辰戦争とは、いったい何であつたか。現代の国際政治や世界各地の紛争を読み解く鍵として、地政学の考え方がある。ある地域のパワーバランスが崩れ、統治権力に空白が生じたとき、周囲の力がその空白(真空状態)を埋めるように働くというのだ。

本書では、加茂町を中心に孫子の兵法などを援用し、地政学的な分析が試みられていて大変興味深い。

徳川幕府の大政奉還により佐幕と勤皇の力の均衡が崩れる。幕府領預り地であつた加茂町は、封建領主の直接支配を受けなかつた

め、この力の空白に敏であつた。懸命の謀報活動が越後決戦を呼び寄せる加茂勤皇党の活躍を追う第1章。第2章、加茂軍議では、当初は盟主不在の多国籍軍である列藩同盟軍が、協同戦線の展開に向けて、短時日のうちに全軍の意思を統一していく過程が描かれる。第3章では、乾坤一擲の戦いに挑む同盟軍の大義を、討薩ノ檄として掲げた長岡城奪還戦が語られる。さて本書の主人公はと問う人があれば何と答えよう。難田松溪か、河井継之助か、雲井龍雄か。私には越後の小京都と称される加茂の町そのものが主人公に思えた。

品田 満

(長岡市開府400年記念事業準備室長)

■新潟日報事業社・16
20円

書籍「越後戊辰戦争と加茂軍議」は、加茂商工会議所窓口の他、市内の(尙)川口書店(上町)、(尙)番場堂書店(仲町)、(尙)ニック加茂(千刈)、県内の各有名書店で販売しております。
また、アマゾンからもお買い求めいただけます。